



# 堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

令和3年4月 第1号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

## 《令和3年度 新年度・新学期が始まりました》

4月に入り、校庭の草木も新しい葉を広げ、緑がまぶしくなってきました。春の訪れとともに、堀船中学校でも令和3年度の新学期が始まります。今年度から特別支援学級も開設され、新入生72名、2年生66名、3年生63名、全校生徒201名での船出です。

新たな気持ちのもと、共に助け合いながら、新年度・新学期をスタートしましょう。

思いやりや優しさを持って、友達・仲間を大切にしながら、みんなで前向きに取り組んでいってください。そして、堀船中の良い伝統を受け継ぎながら、生徒のみなさんと教職員が一丸となって、より良い学校をつくっていきましょう。

## 《本校の教育目標等です》

北区教育ビジョン2020の人権尊重の精神を基調とし、心身ともに健康にして、国際的視野に立った社会に貢献し、自立した人を育成する。

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

### 【目指す堀船中学校像】

- ・生徒が主体的・協働的に学び、自ら問題解決を求める授業が展開される学校
- ・思いやりの心と、互いに認め合い、励まし合い、高め合う人間関係がある学校
- ・心身ともに健康で、豊かな心を育む学校 ・明るく元気な挨拶が飛び交う学校 ・地域に愛され、落ち着いた環境が整備された学校

### 【目指す堀船中生徒像】

《生活目標:堀船中生5項目》(生徒手帳掲載)

- 1 何事にもみんなで協力して取り組む堀中生
- 2 すべての人に思いやりの心が持てる堀中生
- 3 誰にでも自分から先にあいさつができる堀中生
- 4 どんな時にも時間やルールマナーを守る堀中生
- 5 誰の話でもきちんと聴くことができる堀中生

### 《堀船中ホームページ》

北区メール配信サービスと連動してお伝えします。メインサイトは、学校で配布する様々な通知や各種たよりを掲載し、学校が発信する情報をお知らせします。また、生徒のみなさんが活躍する姿や、教育活動の様子をできる限り伝えていきます。(ほぼ毎日更新しております。生徒の様子をご覧ください)

ホームページが更新されたこと等は随時、北区メール配信サービスを活用してお知らせいたします。メールには、ホームページにすぐアクセスできるようにリンクをはっているの、スマホ等によりその場でご覧いただけます。メールやホームページの情報は、お子様とぜひ、共有してご活用ください。

## 《令和2年度卒業生よりいただきました》



卒業生より、校歌の歌詞が書かれた手作りのボードを卒業記念品としていただきました。

後輩達のために、大切に使用させていただきます。  
ありがとうございます。

## 渋沢栄一の生き方（3）

### 1 帰国（明治元年）後、駿府（現在の静岡県）の慶喜の元へ

フランス滞在が10ヶ月ほどを過ぎた頃、栄一の元に日本から驚きの知らせが入りました。それは、江戸幕府が終わり、天皇に政権を返した（大政奉還）という内容です。とはいえ、昭武の留学は5年を予定していたので、栄一達はまだまだ帰るわけにはいかない状況にありました。そんな中、鳥羽・伏見の戦いが起こると、慶喜が大阪城を退去して旧幕府軍は敗北。慶喜は出身藩の水戸で謹慎することになります。情勢はめまぐるしく変化を続け、明治元（1868）年9月になると、ついに新政府から昭武に帰国命令が出されます。一行はフランスを出発し、11月3日に無事到着したのでした。

栄一は昭武から水戸に来るよう誘われましたが、一橋家の家臣であるからと断りをいれると、水戸から静岡に移った慶喜のもとを訪ねます。

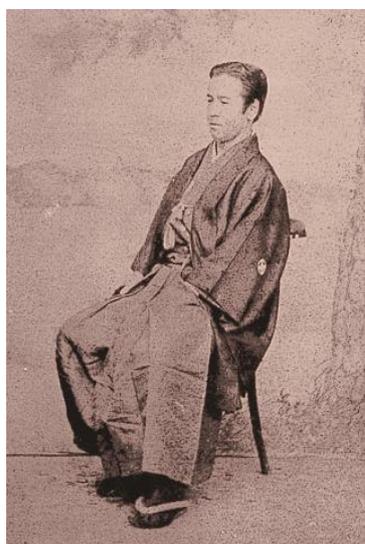
再会した慶喜は、栄一が静岡に来たくれたことを大変喜びました。慶喜はさっそく栄一に「勘定組頭」（静岡藩の財政を司る勘定頭の直属の部下）の地位を与えて、財政再建の現場のトップとして抜擢しました。そんな慶喜の期待に、栄一は見事に応えます。フランスで学んだ、個人に元手がなくてもたくさんの「株主」からお金を預かって商売をして、もうけが出たら「株主」たちに分配するという仕組みを、栄一は具体的に実践したのです。それが、日本で最初の合本（株式）組織「商法会所」です。

### 2 大隈重信の説得で官僚になる

明治2（1869）年、栄一は明治新政府より突然「民部省租税正に任ずる」という命令を受けました。この役職は今でいう国税庁長官のような重要な役職です。明治新政府は、栄一の活躍ぶりをつぶさに見て、政府にとってなくてはならない人材であると思っていたのです。しかしその時はちょうど静岡藩の財政改革が軌道に乗り始めていた頃で、栄一は今辞めてしまったら慶喜に申し訳ないという想いを強く持っていました。断りを入れるつもりで出向いた東京で栄一を説得したのが、大蔵大輔（現在の次官）であった大隈重信でした。重信の熱心な説得により、栄一は大蔵省への入省を決心します。

入省した栄一を待っていたのは、廃藩置県という大問題でした。しかしこの困難な課題に対しても、栄一は様々な処理案を早急に立案することで存在感を示し、自らの評価を確実に高めていきました。官僚として手がけた仕事は、物納から通貨に改める租税制度の改正、郵便制度、貨幣改鑄、公債発行をはじめ、さらには官庁建築、鉄道施設案など多岐にわたります。栄一は多様な実務をこなしながら、近代日本の基盤づくりに奔走しました。

しかし明治6（1873）年、大蔵卿となった大久保利通と対立すると、井上馨らとともに大蔵省を辞め、栄一は実業界への転進を決断するのです。



大蔵省在職当時の栄一 渋沢史料館所蔵



大隈重信 早稲田大学大学史資料センター所蔵